

2017 センター試験特集（その3）

センター試験特集最終回は、地歴・公民科の各科目の担当者からのメッセージです。宮一生は理科や地歴公民の受験勉強を始めるのが遅いようです。中学校の理科や社会とは学習量が違います。「あと一か月あれば間に合ったのに・・・」ということがないように、下記の学習アドバイスを参考に、しっかり取り組んでください。

世界史B

出題構成は、大問4題、マーク数36個と例年通りだった。設問の形式は、問題文の正誤を問う問題が36問中24問、空欄補充問題が4問、年表や事項を時代順に配列する問題が3問、グラフを用いた問題が昨年と同じく1問、それぞれ出題された。また、今年は地図問題が4問出題されており、昨年の2問から増加している。時代及び地域については、かたよりなく出題されている。難問はないが出題範囲は広いので、教科書の隅々まで、地図も含めて丁寧に学習しておく必要がある。

今回の世界史Bの全国平均は、地歴科の中で最も高く、65.44点（1月20日付中間発表）で、標準偏差は22.80と最も大きく、得点にばらつきがあった。本校でも同じ傾向が見られ、平均68.59点、標準偏差は17.85だった。

世界史Bは学習する量が多く、様々な時代・地域・分野の知識が問われる。「世界史は一か月集中すれば大丈夫」と話す合格体験者もいるが、それは、定期考査レベルの内容を把握している場合である。センターは難問・奇問はほとんど出題されない。**まずは、普段の授業に集中し、教科書の内容を確実に身につけることが大切である。そのためには、当たり前のことだが、自分で工夫して勉強しなければならない。（言われたとおりにやっているだけでは点数は伸びない。）**それに加えて、**課外講習を通して、センター試験対策の演習を数多く行うことが高得点につながる。**2年次生は、この1年で学んだ内容をしっかりと復習しておこう。模擬試験は復習するよいきっかけになる。学力は簡単には向上しない。集中力と毎日の努力のみである。今年も、「もっと早く本気で受験勉強を始めればよかった。」という3年次生の嘆きを耳にする。受験勉強をやり始めて、自分が理解していない（覚えていない）ということにはじめて気がつく。そこからが本当の受験勉強のスタートになる。それが3年生になってからでは手遅れである。

日本史B

今年もセンター試験が終了した。高校新指導要領（新課程）3年目であり、昨年のセンターにみられた「一次的な知識からもう一步派生させた“二次的な解答”を求める」傾向がさらに顕著となり、より全面に打ち出された形となった。また2年連続で平均点が上昇したことから、今年度の日本史B問題は難化が予想されたが、大学入試センターによる1月20日付中間発表による日本史Bの平均点は59.28点で、昨年より6.27点も下げ、難化の傾向もまた顕著であった。+6点以上ということは、例年より難易度が2~3問ほど増加したということであるから、受験した高校生にとっては大問を解き進める毎に難問にぶつかるような心境であったと思われる。

本校生の平均点も64.0点（中間発表平均点より+4.72点。なお昨年度は本校平均点は71.8点（センター平均点より+6.25点）であった。とりわけ文系科目を得意とする本校生にとって、日本史B目標を100点と定めて頑張った生徒も少なくない（今年日本史100点は1名（自己採点結果より））。例年日本史Bで平均点+5点以上をもって2次試験のアドバンテージとした本校生であったが、正直今年度の日本史B問題でそのアドバンテージを取れたと感じた生徒は半数もいなかったように思う。

ではなぜこのような結果となったのか。改めて69回生の日本史学習の取り組みを反省とともに振り返りたい。

まず第一に、日本史学習の基本的な取り組みを「（一次的な）知識の把握」とし、さらに「知識定着のための取り組みを怠った」ことにある。歴史科目（日本史）は小・中学校から履修している科目でもあり、高校生にとって比較的取り組みやすい科目であるが、改めて「なぜ高校生になっても日本史を学習するのか」ということを考えてほしい。言うまでもなく、高校日本史は「小・中の学習内容よりも深化した内容を学ぶから」である。振り返ってみると、学び始めに必要なこの覚悟をもって取り組んだ生徒が存外少なかった。高校日本史における膨大な知識量の把握を完全に怠っていた。まずはこの覚悟を早い段階から意識して学習に臨んでほしい。

第二に一次的な知識の網羅を重視し、二次的な知識の把握を軽視したことも反省点に挙げられる。センターはもはや一問一答などというレベルではない。一阶段階で類推できる解答からさらに正答を導き出すことを求めてくる。一次的な知識に対し、派生され得る知識をどれだけ把握できるかが、これからの日本史学習に求められる学力となる。またそれを試されるのが今後のセンター入試、或いはその後の新テストに反映されてくると思われる。

また出題形式をしてみるとほぼ例年通りであるが、従来の7通りの形式に地図や資料（史料）を絡める問題が増加した。これもまた二次的な正答を求めることができる力が必要とされる問題である。

今後もこのような傾向で作問されると予想されるわけだが、そのためには一帯どのような対策が必要となるだろうか。

一つ目は「基本的な歴史事項については授業や定期考査でしっかりと把握・理解しておく」ことが大切である。一過性的な学習（定期考査の直前対策や対策なしで模試に挑むなど）による一次的知識の定着不足では、出題者の思惑通り（？）点数を積み重ねることはできないし、まして平均点以上の高得点者になることは難しいと理解しよう。もともとそのような学習者は平均点以上求める資格はないのである。①授業前に教科書をよく読んで歴史事項（歴史的発端・経緯・結果）を確認した上で②授業に集中し、③サブノート等を利用するなどして学習内容をしっかりと定着させよう。一次的な知識の理解・把握を確実に。暗記と言われればそれまでだが、知識の定着なしに二次的な理解に進むことはできない。何度も繰り返し教科書を読み、授業を受講し、学習後の定着を促す努力を惜しまないこと。この学習対策をしっかりと肝に銘じてほしい。

二つ目は日本史学習における学習量について。本校の場合に限って言えば、最低限「教科書の内容をベースにすること。某学習塾では「教科書を全部覚えるなど無意味」と言っているらしいが、そんなことはない。教科書を学習範囲とし、教科書に記載されている内容を、まずは漏らすことなく把握する。概観をつかんだ上で授業に臨み、日本史学習の必要充分量であることを確認してほしい。「教科書の情報量が多すぎる」と感じるのであれば、その時点で高校日本史に対する取り組みは甘いと考えてほしい（全てを覚え、理解せよというのではなく、覚悟として「教科書という枠組み」の中で学習を完成させるということをも日本史学習のスタンダードにしてほしい、ということだ）。

最後に日本史B学習計画についても俯瞰しておきたい。1年生であればこれから、2年生であればあと10ヶ月、日本史Bを学習していくが、改めて日本史学習の基本的なスタイルをもう一度確認しておこう。

A. 従来の基本的な日本史学習計画

| 学習時期 | 授業単元 | 学習・入試対策 |
|--------------|----------|-------------|
| 2年生前期(4~9月) | 原始・古代~中世 | 授業中心 |
| " 後期(10~12月) | 中世・近世 | 日本史B模試開始 |
| 3年生0学期(1~3月) | 近世・近代 | センター1年前 |
| 3年生前期 | 近代・現代 | 模試本格化 |
| " 後期(10~11月) | 現代 | センター対策・私大対策 |



B. 今後の基本的な日本史学習計画

| 学習時期 | 授業単元 | 学習・入試対策 |
|---------------|----------|---------------------|
| 2年生前期(4~9月) | 原始・古代~中世 | 授業中心 |
| 3年生0学期(10~3月) | 中世・近世・近代 | 模試(入試)に向けた予習と復習の本格化 |
| 3年生前期 | 近代・現代 | センターを意識した学習 |
| " 後期(10~11月) | 現代 | センター高得点対策 |

これまでは左表Aの学習計画で立てられることがおおかった。しかし新課程で理科基礎科目に対する取り組みが増したことで、従来のそれでは大学入試に対する準備が間に合わないのではないかと指摘する声が高まってきている。Aの計画では、今まで主要3科目を中心とした学習を「2年生12月まで」とし、それ以外の理社科目は2年生1月以降から受験対策を開始するという、いわゆる「3年0学期(1月開始)」型であった。近年そのAを見直した学習計画が右表Bである。2年生の1月から始まる3年0学期を3ヶ月前倒しし、地歴科目の受験(模試)対策を10月からスタートさせる「3年0学期“10開始”型」である。B計画の特徴は3つ挙げられる。「a. 主要3科目に対する基礎学力の定着も3ヶ月前倒し」こと、「b. 地歴公民科目についても3ヶ月取り組みを早める」こと、そして「c. 倫理政経については4月からしっかりと対策立てる」というものである。本校では3年0学期的な概念がいまいち希薄ななか、10月型を提示することが有効か否かは見解の分かれるところであると思うが、如何であろうか。

本校が進学校である限り、文武両道は自明であるが、部活動への積極的取り組みを理由に学習対策が真剣に練られていない生徒が激増しているように感じている。高校時代は楽しく短い。これからは高校2年生というシーズンは半年であり、高校3年生等というシーズンに至っては存在しなくなっていくであろう。

高2の10月からは「受験生」となる。10月から6月までの9ヶ月間が受験生としての部活動であることに早急に気がつかなければならない。遅きに失することのないよう、高い目標をもって計画を立て、しっかりとミヤイチの先生方に教えを請い、見事進路を達成してほしい。

地理B

現2年次、地理Bで受験を予定しているみなさん・来年地理Bを選択するみなさんへ

独立行政法人大学入試センター(平成29年1月20日付)によると、平成29年度大学入試センター試験地理B受験者平均点62.34点。本校3年次生平均点64.4点(普通科文系75.1点・普通科理系68.7点、理数科59.2点)であり、例年どおり、本校の授業時間数に比例した平均点であり、個別にみても、授業の出席、課外の参加率に応じた結果となっています。

センター試験問題は昨年度より易化し、出題内容も大問6小問35問と同じでした。第1問自然環境と自然災害、第2問資源と産業、第3問都市・村落と生活文化、第4問中国、第5問スペインとドイツ、第6問壱岐島の地域調査でした。基本的な内容でどれだけ教科書を読み、問題を解いたかで、個別には難易度に差があったかと思いますが、やはりこれもしつこいようですが、**授業への取り組み、課外の出席率に比例しております。**それにしても3年生はよく得点を伸ばしたと思います。

そこで、これからの授業に向け、特に2年生は今すぐ、1年生の皆さんには来年度からのスタートですが、1年後の状況として読んでいただきたいと思い、まとめました。

【普通科文系】もうすでに昨年4月から4単位(週に4時間)の学習を始めていますので全国的にもめぐまれたカリキュラムにおいて学習しております。3年次も4単位の授業でありますので、全国の地理受験者や他の地歴科目選択者に負けぬよう、このリード有利に学習して下さい。もし、**まだ学習内容が満足いくほどのものでないならば、今からでもそのリードを大きく伸ばしてほしい。**しっかりと授業に**取り組み、定期考査にむけ学習**してください。1月模試の復習はとても大事です。センター試験の内容と同レベルであり、決して難しい内容ではありません。

【普通科理系】現在は地理Aで学習していますが、新課程になってから、地理Bの出題内容が地理A的な内容(昨年、今年の第一問)で作問されているので、むしろ地理Bよりも広い(今どきの)地理的視点で問題を捕らえることができるので、最終的な吸収力(伸び率)は期待できます。3年次から地理Bの学習となりますが、今の授業で学んでいる内容は非常に重要です。また、政治経済の内容も地理と重なる大事な内容です。**1つ上の先輩方は「世界史、政経ちゃんとやればよかった」と後悔していました!**2年次学年末考査に向け、今日からの授業を大切に組み込んで下さい。

【理数科】来年度からの授業を、首を長くして待ち望んでいることだと思います。理系ですので、どうしても理系科目の比重が大きく、地歴、公民科目の学習時間が少なくなっておりますので、模試を受けても得点が伸びず、3年の冬まで判定が悪いままで、第一希望への出願を悩みがちです。特に地理B選択者は100点分学習していないので、良い判定がでるはずありません。その分理数科目で総合点を上げていれば別ですが。理数科のセンター試験に向け目指すところの「地理の力」は、**短期間で問題内容を理解できるだけの目線、経験**です。時間が無い中で得点を伸ばせる力は、1年次で学んだ世界史の知識や2年次の現代社会の学習事項も重要です。また、日頃から世界や日本の都市について、興味をもって生活しているか、社会問題を意識しているかが大きく影響します。センター地理の問題は日常の生活の中にあります。同じ理系の普通科や全国で先に地理を学習している理系のライバルを追い抜いていこう。

倫理

1 地理歴史B3科目と公民3科目の全国平均点と順位(倫政は2012年から実施)

| | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 |
|---|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1 | 倫理72 | 倫理69 | 倫理69 | 倫理69 | 世B63 | 地B70 | 世B66 | 世B67 | 世B67 |
| 2 | 政経69 | 地B65 | 地B66 | 日B68 | 日B62 | 世B68 | 日B62 | 日B66 | 倫政67 |
| 3 | 地B64 | 日B62 | 日B64 | 倫政67 | 地B62 | 倫政67 | 倫政60 | 倫政61 | 政経65 |
| 4 | 世B63 | 世B60 | 世B61 | 地B62 | 倫政61 | 日B66 | 地B59 | 地B61 | 地B64 |
| 5 | 日B58 | 政経59 | 政経59 | 世B61 | 倫理59 | 倫理61 | 政経55 | 政経60 | 日B61 |
| 6 | — | — | — | 政経58 | 政経55 | 政経54 | 倫理53 | 倫理52 | 倫理55 |

倫理の平均点は、2012年まではつねに高かったが、2013年から低くなり、今年も最下位の平均点であった。この傾向は来年以降も続く予想される。

2 全国平均点との差

| | 全国平均点 | 宮一平均点 | 差 | 受験者数 |
|-------|-------|-------|------|------|
| 2017年 | 55.0点 | 59.5点 | +4.5 | 31人 |
| 2016年 | 51.8点 | 60.3点 | +8.5 | 24人 |
| 2015年 | 53.4点 | 63.3点 | +9.9 | 27人 |
| 2014年 | 60.9点 | 68.8点 | +7.9 | 36人 |
| 2013年 | 58.7点 | 65.2点 | +6.5 | 44人 |

全国平均点と宮一生の平均点を比べると、今年は 4.5 点上回っているが、ここ 5 年間では最も振わなかった。来年の踏ん張りを期待したい。

3 出題傾向

全体的に難しく、昨年並みの難易度。これまで同様、網羅的に出題されている。文章の量が多く、教科書で取り扱われないマイナーな人物も多く見られた。

例年と同じく、大問 4 つともに、本文の内容に合致する記述を選ぶ問題があり、4 問×2 点=8 点。原典からの文章を読み、その内容の説明として適当なものを選ぶ問題は、荻生徂徠、カント、トクヴィル、マテオ・リッチの 4 問×3 点=12 点。資料の読み解きが 1 問、3 点であった。

これらの合計 23 点分は、「倫理」を学んでいなくても、読解力、資料を読み解く力のみで解ける問題だが、時間が取られる難点と共に難易度も高い。

「倫理」の教科書全 7 冊のどの教科書にも載っていない人物として、セザンヌ、尾形光琳といった芸術家の選択肢も出題された。また前述の、トクヴィル、マテオ・リッチもどの教科書にもない。

4 難問

教科書に載っていない人物でも、これまでは消去法で解けたのだが、今回は必ずしもそれでは解けない問題が出題された。

問 情報社会や消費社会をめぐる問題についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① ボードリヤールによれば、消費社会のなかで人々は、メディアから提供される情報を手がかりに、もっぱら有用性の観点から商品を購入し、ただ大量に消費することそれ自体を目的としている。
- ② リップマンによれば、人々はメディアの情報から一定のイメージを思い浮かべ、それに従って現実を理解しているので、メディアによって情報が意図的に操作されると、世論が操作される危険がある。
- ③ ブーアスティンによれば、現代のメディアが提供しているのは、物語としての迫真性をそなえた「本当らしい」出来事にすぎず、視聴者の側はメディアから流される情報に関心をもたなくなっている。
- ④ マクルーハンによれば、近代社会では活字メディアが支配的だったが、20 世紀に入って映画やテレビのようなメディアがそれにとって代わった結果、人間の感覚や想像力は貧困なものになっている。

「倫理」教科書全 7 冊の掲載状況

| | 東書 | 清水 | 山川 | 実教 | 第一 | 数研 | 教育 | 資料集 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| ボードリヤール | — | — | ○ | — | ○ | — | — | — |
| リップマン | ○ | ○ | ○ | — | — | — | — | ○ |
| ブーアスティン | ○ | ○ | — | — | — | — | — | ○ |
| マクルーハン | ○ | ○ | — | ○ | — | — | — | ○ |

正解は②のリップマン。東書・清水・山川の教科書を使っていた生徒は解けるが、実教・第一・数研・教育の教科書を使っていた生徒が解くのは難しかっただろう。各文の後半部の文章が不自然でないものを捜すしかない。

これまでは教科書を覚えることを中心にすすめてきたが、今後は教科書だけでなく資料集にも必ず目を通しておかなければいけないことになる。

政治経済

大問 4、小問 34 での構成は昨年と全く同じであり、図表・グラフも計 6 問で昨年同様でした。典型的、基礎的な問題が中心で、全体の難易度としては昨年より易化し、平均点で 3 点上昇しました。今年度の特徴的な設問として、複数の課題をクリアしないと正答できないものがいくつか見られ、たとえば、第 2 問の問 2 は所得再分配比率と相対的貧困率の数値と、各国の歴史的事実とを重層的に絡ませた問題でした。また、第 3 問の問 6 は選挙やデモの国政への影響についての問題で、これも歴史的な知識と用語の知識が備わっていないと正答できないものでした。本校生徒の自己採点の結果では、全国平均プラス 10 点であり、ここ数年では一番良い結果となりましたが、目標としていた点数に届かなかった生徒も少なからずいました。言うまでもありませんが、常日ごろの授業を大切にしていた者が高得点を得ていたようです。